

The Life of Charlotte Brontë という小説

—— 伝記の中の小説的手法をめぐって ——

長瀬久子

I

Elizabeth Gaskell の *The Life of Charlotte Brontë* (以下 *Life* と略称する) がブロンテの伝記としては多くの欠陥があることはよく知られている。Heger に対するブロンテの恋愛感情が伏せられていること、父 Patric の横暴さを誇張的に書き連ねたり、弟 Branwell の謎めいた不倫事件の相手とされた Mrs. Robinson を、淫乱な悪女として強引に断罪するなど、ブロンテの生涯に重要な関わりのあった人々について、故意に隠蔽したり、不正確な情報に基づく一方的な記述が見られるなど、*Life* は伝記としては致命的な欠陥を抱えている。ブロンテの作品への言及が少ないばかりか、彼女の作品に 'coarseness' があると進んで認めている点¹ や、Angria の物語や *Wuthering Heights* についてほとんど言及しない事実は、ギヤスケルにはブロンテ姉妹の天才が理解できなかったという評価に繋がりがちである。Carolyn Heilbrun が「ギヤスケルはブロンテの天才を称えず、女性作家即ち奇人という汚名から彼女を救い出し、安全な女らしさへと連れ戻った」² と指摘するように、ブロンテの「女らしさ」が語り手によって絶えず強調されている。*Life* の自己否定的な犠牲者としてのブロンテ像は、この作品の出版以後しだいに神聖視され、19 世紀末頃までには *Jane Eyre* の迫力は忘れ去られ、ブロンテはもっぱら不器量だが気高い女性として神聖視されるに至ったという。³ その反動のように 20 世紀後半には、ブロンテがフェミニズム文学の旗手として持て囃されると、ブロンテ像の変化に伴って *Life* の評価は下降した。「女らしさ」と「悲劇的生涯」という虚構によって、「悲劇の聖女ブロン

テ」の神話を生んだ元凶として、20世紀後半には*Life*はそれとの距離が新しい
ブロンテ伝の価値を決定する、ある種の負の基準を提供してきた観がある。

しかし虚構を含まない伝記などどこにも存在しないのである。伝記が散漫な記
録の羅列でなく、最低限の纏まりを備える時、必然的に伝記作家の想像力が関わ
る。純粹に客観的な、対象の正確な再構築である伝記とは存在し得ない仮想の目
標に過ぎない。伝記が有機的な統一性を内包する作品に近づく程、伝記作家の想
像力の介入は、瑣末な部分から作品の基本的構成にまで及び、比重を増す。伝記
は、描かれる対象の上に伝記作家自身の人生への関心が色濃く投影した創作に他
ならない。

*Life*が虚構的であることはEdgar Wright⁴やAlan Shelston⁵も指摘して
いるが、シェルストンのようにこの作品を高く評価する研究者でさえ、その虚構
性をどちらかといえば作品のマイナス面として論じている。しかし複数のより実
証的なブロンテ伝が出版された結果、伝記資料としての価値が低下した現在なお
目立つ*Life*の独創性、時間の経過とともに役目を終えた過去の平凡なブロンテ
伝からこの作品を際立たせる特異性は、その虚構の優れた芸術性、虚構を構成す
る小説家の卓抜な技巧にある。それがあつたために、この作品は今なお読者を感動
させ得る。極言すれば*Life*はシャーロットをヒロインとする小説なのである。
*Life*の虚構から派生したブロンテ神話が長期に渡ってブロンテ像を決定してき
たこと自体、この作品が、ある普遍的、原型的な物語を含んでいることの証明と
も言える。ブロンテ像に忠実か否かに固執するあまり*Life*の芸術的効果を見過
ごしにすることは、小説家ギヤスケルのためには惜しまれる。本稿では*Life*を
小説として読み、語り手、背景、登場人物、メタファー、物語のパターン等、ギヤ
スケルが用いた小説的手法を分析し、作品のテーマに迫りたい。

II

ヒロイン、シャーロットの女らしさは、家庭的な挿話の積み重ねと語り手の解
説との双方によって、*Life*の全篇を通じて終始強調される。語り手は、自身も
女らしく、倫理と慈愛に富む反面、かなり限定的な価値観を持つ典型的ヴィクト
リア朝レディ、〈ギヤスケル夫人〉である。彼女はひとつひとつの挿話をシャー

ロットの女らしさと関連付けて解説し、読者に率先して賛美する「女らしさ」の解説者である。また、時には読者と作品の間に立って、批評家によって‘coarseness’の嫌疑を掛けられた被告ブロンテを*Life*という法廷で、陪審に見立てた読者を前に弁護する弁護人の役を務める。ハイルブランがギヤスケルはブロンテを女らしさの領域に連れ戻したという時、もっぱらこの語り手を指している。しかし、この語り手〈ギヤスケル夫人〉は必ずしも小説家ギヤスケルと同一ではない。ギヤスケル自身、自分にはたくさんの‘mes’があると述べていることから窺われるように、自分の人格の多様な局面を意識していた。⁶ *Life*では小説家ギヤスケルは、自分の人格の一面のみを誇張的に授けた語り手〈ギヤスケル夫人〉に、時代のセンチメンタルな嗜好に沿うシャーロットの女らしさや自己犠牲を声高に賛美させ、境遇の犠牲になったことが彼女の「悲劇」だったと解説させる。一方、小説家自身は作品の背後に隠れ、実はヒロイン自身の女らしさや自己犠牲こそが彼女の人生を損ない、悲劇とした要因であったことを、物語のパターンから細部のメタファーにいたる周到なレトリックを駆使して、読者に提示する。〈ギヤスケル夫人〉は、作品の一種の「信頼できない語り手」⁷として、女性に女らしさや自己犠牲を強いる男性中心社会に対し、ヒロインの悲劇を通じて強い批判を投げかける小説家ギヤスケルをカムフラージュしている。

*Life*には〈ギヤスケル夫人〉の他にもうひとりの語り手がいる。シャーロット自身である。*Life*に挿入されたシャーロットの膨大な書簡の抜粋は、彼女の女らしさの裏付け資料となるが、それ以上に、女らしい〈ギヤスケル夫人〉では語ることでできないヒロインの内面——若い彼女の白日夢、行動の欲求、苦い失意、情熱、野心、あるいは小説家 Curren Bell としての知的で自信に満ちた文学観や遠慮のない人物批評などが、彼女自身の言葉と肉声で語られる。*Life*のヒロインとしては似つかわしくない辛辣なユーモアなどはこれらの書簡からは削除されているが、読者はこの方法によって、作家が第一の語り手に、単に女らしさの精髓として解説させた人物の内側に、実は独立心と野心と情熱を秘めた人間、知性豊かな芸術家が存在することを知る。

事実のみを見ればブロンテの生涯は必ずしも悲劇的とは言えない。忠実な友人と人生の苦楽を語り、非凡な姉妹と稀有な創作の時間を共有し、平凡だが誠実な夫と穏やかな結婚生活を経験し、作家として空前の大成功を収めた彼女の生涯は、

まれに見る成功物語として書くことも十分可能である。にもかかわらず読者が *Life* に紛れもなく悲劇を感じるのには、語り手の解説によってではなく、作品の背後で操作する小説家ギaskellの手腕による。第一の語り手にシャーロットの女らしさを語らせ、シャーロット自身に自己を語らせたギaskellは、女らしさの規範に囚われた才能豊かなひとりの人間に起きる悲劇を、小説家のレトリックを通じて、提示するのである。

ギaskellがブロンテの人生の上に見たものは、おそらくブロンテという特殊な個人の人生というよりは、自分が常に強く意識し、多くの小説の中で、一見穏やかに批判し続けた問題、即ちヴィクトリア朝社会の閉ざされた家庭という領域に生きる女の苦悩であった。*Life* はこの問題をギaskellの他のどの小説より遙かに明瞭直裁に、テーマとして据えたものである。おそらく著者独創の虚構のヒロインという形態を取るのではなく、ブロンテへの友情や、誹謗中傷された死者の名誉回復という恰好の口実のもと、ブロンテを隠れ蓑として利用できたために、ギaskellは、自分の創造したヒロインの場合には考えられないほど、この問題を徹底的に追求できたのであろう。

III

父権社会の閉ざされた領域に生きる女の悲劇を表現するために、ギaskellは周到にレトリックを固めている。*Life* では、男性の領域と女性の領域は対立的図式を構成するように配置されている。ブロンテ師やその友人同僚、シャーロットの夫となる Nicholls 師等男性登場人物は、精神的には一様に理知的で意志強固であり、大学教育を受けている。彼等は皆、国家権力と密接に関わる国教会の聖職者で、トーリー的政治意識が活発で、Luddite 事件におけるように、軍隊とも提携する (137-38)。彼等は公共性、神聖、権威、力を表象している。分けても作品世界の超自我を形成するブロンテ師は、銃弾を装填したピストルという、男性原理の象徴を常に身に帯び、しばしば発砲して妻を威圧する夫 (91)、克己的剛健主義のために妻の派手なドレスを引き裂き (89)、子供の装飾的な長靴を焼き捨てる独善的な家長として描かれる (88)。教育家 Day 氏の教育法は子犬を放り投げる場面を見せ付けることで幼い少女の神経を鍛錬するという過酷なも

のである(88)。Roberson 師は女中に言い寄る青年を、自分が教育する少年たちの手で拷問することで、哀れな恋人と少年たちとの双方に規律を叩き込む(138)。ギヤスケルは物語の開始草々、父権の代行者たちが、男の力の論理で女や子供や動物を支配管理し、その自然を圧殺するこれらの挿話を矢継ぎ早に繰り返すことで、シャーロットの生活領域を囲む堅固な男性世界を提示する。ギヤスケルの意図が男の論理への批判にあったことは、例えばロバーソン師の鉄の規律を、ギヤスケルの全作品の中で、女性原理の最右翼である Miss Matty Jenkyns の場合と比較すれば、一層明らかになる。結果として若者の道徳的向上を招いたのは、規律のために彼らの青春を犠牲にするに忍びずに、女中が恋人を持つことを許したミス・マティーの方なのだから。⁸

一方、シャーロットやその姉妹や母を中心とする女たちは、男のそれと対立する諸特徴、支配に対する従属、公的領域に対する家庭、文化や中央集権指向に対する自然や土着性、国教会に対する、滅びゆく迷信や妖精伝説の世界(110-11、401)に属している。とりわけ最も公的世界から遠く、自然に近く位置する Emily は犬と生活を共にし、人間より動物を愛している(268-69)。またシャーロットのほとんど全生涯に渡ってブロンテ家の台所に住み付き、姉妹の土着性や幽霊信仰を培った老女中の Tabby は、支配される女としてのシャーロットの分身として、作品の中で執拗に言及される。

廃残者として死ぬブランウェルは、明解な男女の対立的構図の中で独特な位置を占める。作品内のブランウェルは他の男性登場人物のように純粋な男性としては描かれていない。一面では彼は、姉妹たちとの差別的な教育の機会(153-56)や、彼のみが親から受ける期待や敬意(153)によって、姉妹が負わされた不利な性的立場を炙り出す機能を果たす男である。また彼は作品の中でシャーロットに墮落した男の世界を垣間見させる唯一の男でもある(197、496)。一方彼の薄弱な意志と抑制しがたい情念、社会のアウトカーストという立場は一般に女の属性とされてきたものである。Bonaparte は *Life* におけるブランウェルを、作者が作品中のシャーロットからは除去せねばならなかった彼女のデーモンを演ずる分身として位置付けている。⁹ ボナパートが論じるようにデーモンが本来男であり、ブランウェルがシャーロットのデーモンを演じているとするならば、彼の性的アイデンティティは一層曖昧な様相を呈することになりそうである。

ギヤスケルの描くブロンテ家は家庭ではない。それは男性領域と女性領域に二分された父権社会の縮図である。父は書齋に住んで昼間の公的活動に従事し、娘たちの生活の中心は女性的な生活空間である居間と、被支配者の生活空間である台所で、料理裁縫に従事し、ただ監視人たちが眠る夜中に、灯火を消した薄闇の中で、檻の獣のように部屋中をぐるぐる回りながら自分の自然を解放し、自己を語り、作品を語り合う（166、199）。男女の二分対立、支配／被支配関係の象徴的行為として父娘は食卓を別にして（91）。

また、結婚式の数週間前に袖の薄い服で他家を訪問するという「はしたない」行為をして、婚約を解消された少女の挿話（88）や、義兄の欲望の犠牲となって私生児を産んだ女の肉親が、犠牲となった女よりも征服者である男に寛大であったという近隣の挿話（92）など¹⁰、外の世界の女たちの、女であるための過酷な経験に関する挿話は、作中のブロンテ家で展開する物語と響き合い、シャーロットの悲劇の予告となっている。

IV

Sandra Gilbert/Susan Gubar は、女全体が男の支配下に比喩的に監禁され、比喩的飢餓に苦しむ家父長的社会制度下では、女性作家が自身の過酷な生活を作品に反映させるために、彼女たちの小説にはしばしば飢餓や拒食、あるいは監禁や逃亡の描写が観察されることを指摘し、ブロンテ姉妹の作品を主要な症例として分析している。¹¹ ところでこれらの要素はブロンテが書いた小説を特徴付けるだけでなく、ブロンテが書いた小説を特徴付ける重要な要素でもある。*Life* では、男女の支配／被支配の構図内で、女の幽閉と飢餓のメタファーが、繰り返して用いられて作品のテーマを浮き彫りにしている。*Life* は家父長制社会に囚われ、飢えに苦しむヒロイン、シャーロットに象徴される女の悲劇の物語である。

この幽閉の物語の冒頭、作者はその主要な舞台である Haworth を、社会的には極度に閉鎖的、地形的には「果てしなく続く壁に閉じ込められた感じ」（55）で、人を圧迫する荒野に囲まれた不毛の場所——巨大な牢獄として設定する。第一章のハウースの風土や村人の気風の詳細な描写は、一面ではブリュッセルの寄宿学校や、ロンドンの小路のコーヒーハウスの描写とともに、19世紀小説特有

の背景描写として作品にリアリティを与えている。またそれはシャーロットの個性の形成、ひいては彼女の作品の‘coarseness’には育った土地の風土が深く関与しているという〈ギaskell夫人〉の弁明を支えてもいる。同時にハウスの描写は、牢獄を暗示することで、比喩的なレベルでも機能しているのである。

次に作者はブロンテ家の墓碑銘を写し取る。墓碑銘は象徴的である。そこには、「ハウス牧師 P. ブロンテ師の妻」(57)の Maria と夭逝した二人の娘、「住職 P. ブロンテ師の息子と娘」(58)であるブランウェルとエミリ、「文学士 P. ブロンテ師の末娘」の Anne、「文学士 Arthur Bell Nicholls 師の妻」(59)にして「住職、文学士 P. ブロンテ師の娘」であるシャーロットの 7 人の名が刻まれている。社会制度によって学歴と官職を拒まれ、父と夫によって業績を抹消され、単なる妻や娘に還元されたブロンテ家の女たちの名前が、男の地位、称号、学歴、苗字の中に囚われているのである。死も男の支配から女を解放しないことをギaskell は、彼女が一字も省略せずに丁寧に写し取った墓碑銘に語らせている。

幽閉／監禁のメタファーは、*Life* という物語のパターン構成にも寄与している。幽閉がシャーロット個人の特殊な状況でなく、女の普遍的な悲劇であることの暗示として、ギaskell は物語を、シャーロットの母マライアにまで遡って開始する。父の死後は母と姉妹の間で、完全に「自分の‘mistress’」(81)として行動し、自分の「行動の正しさに自信を持ち、豊かな感性を書簡に披瀝し、エッセイを書いていた独身女性マライア・ブランウェルは、結婚を境として、彼女についての記録を探し求めるギaskell の「視界から薄れ」(83)てしまう。女が夫の家庭に入ることで、社会的に無化する第一の例を、作者はこのように物語の冒頭付近で提示する。この後マライアは、早すぎるその死まで、ただ次々に子を産み、病を朗らかに耐え忍ぶブロンテ夫人として夫の家に閉じ込められる。

シャーロットは娘、長女としての義務感という、女の規範意識に生涯囚われる。それが、住み込み先での機械的労働に彼女を束縛し、弟妹すべてに先立たれた彼女を、父の介護に縛る。父の家が娘にとって檻に過ぎないことは、彼女がほとんど生涯、落ち着かない獣のように夜中に部屋の中を歩き続けたという表現で暗示される(508)。

結婚も解放をもたらすものではない。苦しみや喜びを分かち合った親友や、ギaskell との間に育んだ女同士の友情や連帯は結婚によって絶ち切られ、管理は厳

重化する。ギヤスケルは、シャーロットがその母と同様、社会の視界から消え去る、無化のプロセスを物語の結末付近で反復させることで、それを明らかにする。

Henceforward the sacred doors of home are closed upon her married Life. We, her loving friends, standing outside, caught occasional glimpses of brightness.... (519)

しかしギヤスケルは監禁の物語は反復させながら、監禁者の描写には変化を持たせている。〈ギヤスケル夫人〉はブロンテ師の横暴な行為の描写に多弁を弄したのとは逆に、夫となるニコルズの専横については完全に沈黙する。そこにはブロンテ師が伝記の出版に積極的であったこと、消極的だったニコルズ師がシャーロットのすべての合法的な所有者であったことなど、作者に沈黙を選ばせる現実の理由があった。しかし芸術家は現実の制約を逆手にとって利用する。結果として反復の中で舅と婿の行為の明示と暗示が対照の効果をあげている。黄金の籠に幽閉されたシャーロットが、新婚の喜びの中に諦めをもって再び自己否定を受け入れ、夫に同化していく様子はただシャーロット自身の書簡の何気ない記述によって暗示されるだけである。

... my time is not my own now; somebody else wants a good portion of it, and says, "*we* must do so and so." *We* do so and so, accordingly (520) (Italics mine)

ブロンテ師による横暴な監禁で幕を開けた物語は、ニコルズ師による温情的な幽閉で幕を閉じる。円環が閉じることによって、女の幽閉の悲劇は無限に繰り返すことが暗示される。

V

飢餓や、広い意味での摂食障害のメタファーも *Life* の重要な要素である。飢餓は外部から女に強制されたもの、摂食障害は外的世界の価値観を内面化させた

女が病む病理という意味で、両者が表裏一体をなす現象であることは言うまでもない。作品のブロンテ家の娘たちは父に肉を禁じられてジャガイモを食べ続ける(87)。もっともこの挿話は、飢餓感や偏屈な父の横暴の例として導入されただけではない。Elaine Showalter は、ヴィクトリア朝精神医学が、少女の初潮を遅らせる方法として、他の禁欲的生活習慣とともに、肉食の禁止を奨励していたことを紹介している。¹² 当時の表現に従えば女の「脳の混乱」の原因となる月経の開始を遅らせることで、男性から見て、「健全」な判断力の、道徳律を守る英国婦人が育成されるというのが医学の権威の定説だったとすれば、ブロンテ家の娘たちの食生活はとりもおさず、父権による女性の性の管理を意味している。彼女たちは次には Cowan Bridge の女学校に送られるが、この学校と、この学校がモデルとなった Lowood School では、女の性と身体はより多角的に徹底的に管理され、限度を越えた抑制によって多くの少女が飢えさせられる。

しかし飢餓は常に父権に強制されるとは限らない。歴史上の弾圧された多くの人々同様、作中のブロンテ家でもそれは最も有効な抵抗の武器となる。老齢に加えて、怪我をして働けないという理由で女中のタビーを解雇する父に抵抗して、娘たちは無言のハンガーストライキを「決行」(180) し、ついに共に支配を被る同類を、権力の功利主義の手から取り戻すのである。

作品を通じて最も頻繁で長期に渡る摂食障害は、妹たちの死後、父の介護のために自己犠牲を決意した孤独な中年のシャーロットを襲う、恒常的な食欲不振という形を取る。彼女が絶え間のない不眠と食欲不振のために衰弱し、一週間以上食べ物を飲み下せず、回復後も一日にカップ半分の流動食を茶匙で流し込みながら、それでも父のために床にはつかずに耐えたという挿話(466)は、それ自体シャーロットの痛ましいまでの自己否定の一例である。しかし、ギヤスケルは、そのわずかに十数行先にさりげなく段落と文脈をあらためて、同じ時期のブロンテ師の食欲に関する記述(「すべての関係者に幸なことには、ブロンテ氏はこの冬驚くほど元気だった。十分な睡眠と元気、すばらしく安定した食欲、すべてが精力を際立たせた」[466])を滑り込ませる。搾取する父と、規範意識に囚われて搾取される娘との関係を、小説家は双方の食欲を対照させることで際立たせている。

結婚も新たな摂食障害をもたらすだけである。それは夫という存在がほとんど

必然的にもたらず摂食障害である。シャーロットの死で終わる最後の挿話は、リアリズムのレベルでは、悪阻による食欲減退と、この時期を過ぎた妊婦特有の旺盛な食欲がシャーロットにも訪れた時には虚弱な彼女の体が既に力尽きていた事実の記録には違いない。しかし、ギaskellが作品の随所で提示する飢餓／摂食障害のメタファーをたどり、そこに女の抑圧を読み取ってきた読者ならば、シャーロットの食に関するこの最後の壮絶な描写は、彼女を生涯苦しめた現実的比喩的飢餓のクライマックスとしてしか読むことができない。最後の6週間は「ミソサイジだって餓死しそう」(523) ほどの少量しか口にしなかったシャーロットが、臨終の譫妄状態の中で一瞬間強烈な食欲を示す。

... a low wandering delirium came on; and in it she begged constantly for food and even for stimulants. She swallowed eagerly now; but it was too late. (524)

食べる——それは女の規範意識の下に抑圧されてきたヒロインの自我が、意識の衰えの隙について猛然と自己主張する様の比喩に他ならない。しかし、自己主張は「遅すぎ」る。*Life* の不幸なヒロインは生涯に渡る飢餓のために餓死するのである。

こうして、二人の語り手による異質の語り、背景としてのハワース、男女の登場人物たち、飢餓／摂食障害と幽閉／監禁のメタファー、円環を作る物語のパターン等、ギaskellが駆使する小説の技巧が交錯し響き合う中から、女が社会の価値観を選んで自我を捨てることは、牢獄での餓死につながる事、家庭の天使としての生は即ち悲劇であるという、*Life* のテーマが明らかになるのである。

注

本稿は日本ギaskell協会第12回大会(2000年10月8日)の研究発表の原稿を加筆修正したものである。作品のテキストは初版に基づく penguin classics 版を使用している。

1. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1857; London: Penguin Books, 1985) p.495. 本文中の引用はすべてこのテキストによる。以下引用と関連箇所は括弧内にページ数のみ記す。

2. Carolyn Heilbrun, *Writing a Woman's Life* (New York: W. W. Norton & Company, 1988) p.22.
3. Patsy Stoneman, *Brontë Transformations: The Cultural Dissemination of Jane Eyre and Wuthering Heights* (London: Prentice Hall, 1996) p.40.
4. Edgar Wright, *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (London: Oxford University Press, 1965) ch. 10.
5. Alan Shelston, 'Introduction,' Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (1857; London: Penguin Books, 1985).
6. J. A. V. Chapple & Arthur Pollard eds., *The Letters of Mrs. Gaskell* (Manchester: Mandolin, 1997) p.108.
7. Wayne C. Booth: *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: The University of Chicago Press, 1961) Part 2.
8. Elizabeth Gaskell, *Cranford* (1853; Oxford: Oxford University Press, 1998) chs. 4, 14.
9. Felicia Bonaparte, *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1992) pp.238-39.
10. Sarah Fermi, 'A "Religious" Family Disgraced: New Information on a Passage Deleted from Mrs. Gaskell's *Life of Charlotte Brontë*.' *Brontë Society Transactions* 20 (1992) pp.289-95 によれば、第3版からは削除されたこの挿話はギaskellの創作か記憶違いだという。この小部分についての論考も、*Life* 全体が創作であるとする筆者の論旨の支持となっているような気がする。仮に作者の意識的な創作ではなくて、単なる記憶違いだとすれば、記憶を混乱させたものは、作品世界を有機的に構築したい小説家の想像力だったに違いない。
11. Sandra M. Gilbert / Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New York, Yale University Press, 1980) chs. 1, 2, 5.
12. Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1980* (London: Virago, 1987) p.75.